



特別  
3468  
2





門 18  
3169  
卷 2

再栄花川譚卷之二

佐藤藏

ちんちん、あれ果、どひの外、あぶら奴、それ、鞠を受とんと。  
いひ、刀をとりま回す、ふ切裂い、これ、敬、も吉、斤類  
へ、と、投つくる。その鞠、投へ。一寸の虫、も、五、かの  
魂、ごり、か、この鞠、を、故、貫、受、い、う、り。  
切、れ、れ、鞠、り、この場、を、丸、く、入、い、ご、と、胸、を、え  
ら、一、言、ふ。あ、う、た、あ、ま、ま、怒、り、助、て、ゆ、を、この、う、の、  
幸、と、い、ひ、あ、ま、ま、飛、く、ふ、入、る、長、の、虫、命、も、れ、ご、ら  
と、だ、ん、で、ま、ま、と、目、で、下、知、れ、い、影、頭、あ、う、う、行、平、が、  
振、指、引、わ、れ、切、け、と、長、吉、内、り、と、い、溜、り、直、後、入、る、き

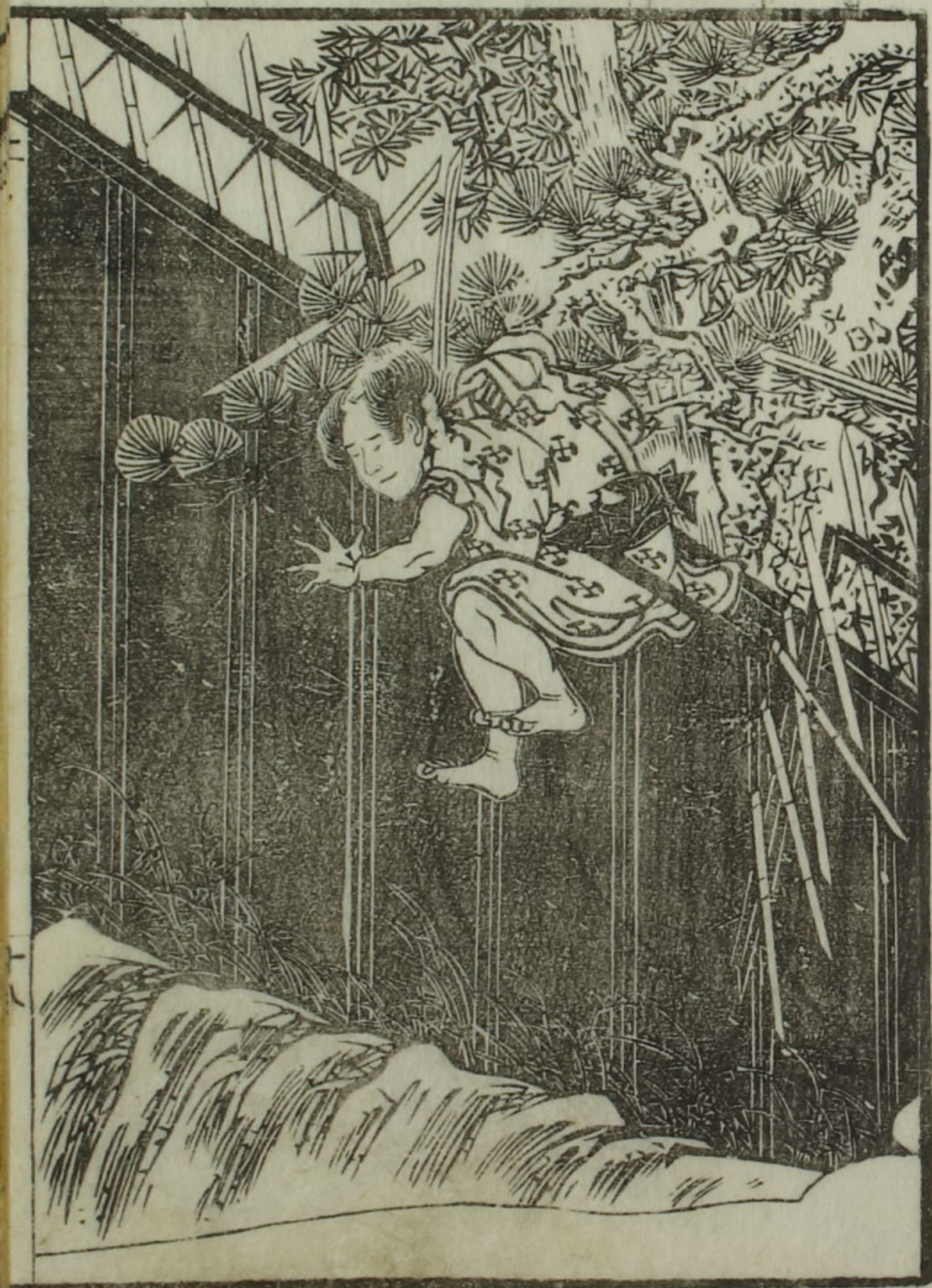
昭和二十七年三月十七日



上  
投井なげいなる泉いん水の泥どろに塗ぬれて濡ぬれ猫ねこのあつるごとくふて  
蠢うごく様よう平へいくひあつてちかたつハ安やす二に安やす二に切きてわれバ  
去さきもせひあく刀やを抜ぬけさせ下くだり下くだり切き結むすぶは煉ねん乃  
刀や尖とりて運うの究きまちたつ飛と石いしの跌つてよりめ  
殺ころを長なが士しがゆきりと踏ふむむおぐ打うち刀やの石いしの長なが船ふね近ちか忠ただ  
切き味あじをんむとく布ふ割わり二にふかんとて倒たふさされやう岸き小  
政せいつゆ移うつ平へい海うみも眞ま土つちの供ともせとて既すで警けい捕とらで拘こさうとつ  
わ刀やの池い水みづも血ちしな小こ深ふかきを韓かん紅こう楓ふうを流ながす小こ徒と佛ぶつとら  
この物もの音ねをのれ文ぶんてやちかたつ妹いの草くさ。何なにか

きりきりたるこの光ひかり系けいおおるに慌あわてや噴ふくと叫こゑぶ声こゑも事こと  
あつてとる表うら黨とう中ちゆう間かんあつて刀やお立たちぬ庭にわの後ごめ  
りた家いえ期き敵てきへ去さ吉きち逃にげさどとて弓ゆみ馬うまもよりその巻まきを  
或あるハ切き伏ふせ踏ふまふ。透す間まをうらむ去さ吉きちの庭にわの築つく垣かき跳と  
越こえゆへも去さ吉きちとて逃にげらせたり  
第二編だいにへんの佐野次郎さのじらうを紀行きぎやう  
この日ひ佐野次郎さのじらうを紀行きぎやうの出来ゆきに家いえのあつたれに當あてこのゆ  
をまらざるにふ若わ黨とう中ちゆう間かんがまらざるゆめりとも返かへり不ふ告こ  
まれば且かつ驚おどき且かつ怒いかる。そのものもさうゆへを走りぬる。





長吉ハ己<sup>やい</sup>こそ  
 得<sup>え</sup>どろた為  
 主<sup>しゆ</sup>従<sup>じゆ</sup>を切<sup>き</sup>伏<sup>ふ</sup>せ  
 堀<sup>ほり</sup>を  
 跳<sup>は</sup>越<sup>こ</sup>せ  
 脱<sup>だつ</sup>き  
 去<sup>さ</sup>る



とや長吉いづれ地ゆれん。あつもの文ふまうりる。この折しも  
狭隈富々進ハ城中より退れぬ途中小く、伴の風声をば  
―ふ忙しく至るお立ちうて。亦富ゆふまう縁故を問ハ  
富ゆふもつし不言葉き。鞠をちまらなうが、唇へ端落し  
始終を物ごり定て長吉ハ、逃がれも滞とありて已ことをほぞ  
太郎たのま後と相く、互退つゝんとつへ。富々進ハ、  
啓るれ、あ速人を東西お知し、長吉を返留させ。あつび出仕  
して縁由を祈せえさるふ。狭野ゆらも。兄をちまらなう  
を祈ぬれ、あ富々家の祈をば、食くちまらなうゆ、武藝

の師範なるをゆめく。名のみたれ下、弟お撃手し、とて言倍  
同形の越度なれ。これおしりて、亦次を左馬、ハ門戸を鎖し。  
長く慎居り。重ての仰をまらへ。又富々進ハ、長士は  
往方をとらぬ。搦らして、執るべしとて、仰下され。さね、ね、ね、ね  
も、ま、己こ、瓜、ゆ、ぎ、さ、ら、な、う、ま、後、を、討、留、て、五、七、里、の、ま、り  
落し、ら、う、が、か、心、お、と、ふ、や。それ今人を殺し、立退る。その祟  
恩の、ま、人、お、係、り、あ、ん。い、ま、引、く、し、て、名、告、く、出、濡、く、死、ん  
ぬ、い、こ、お、ひ、定、ぬ。本の路へさうへんとらつ。又とふや。それさ  
うら、その、本、末、を、味、せ、ら、う、と、ら、ぬ。富々進ハ、換の難きとも























地より生くるごとく。養子居らるや勝りせん。この蛇中よりふ  
つと切し川水ざんくと逆巻と見えたるが。水は忽血を度し  
今まま小蛇とぞひも。廿尋のまりの大蛇也。首のここの  
川もひも。松ふ必死と巻えつ。二つ小切も。蠢と形れ  
べ。流石の養子居も仰天し。ちびも。呆とてのりる。処へ里人  
心み人來るごとく。この光氣ふら。驚た。やどて。養子居み力  
を殺せ。や。や。彼蚪蛇と打らりしね。さてこのり。一郷の  
美談とありて。ある日そのあらしを。誅んとおた繩と養子居  
が足首へ結び。是。究竟の壯者十人をうつし。その繩をひく

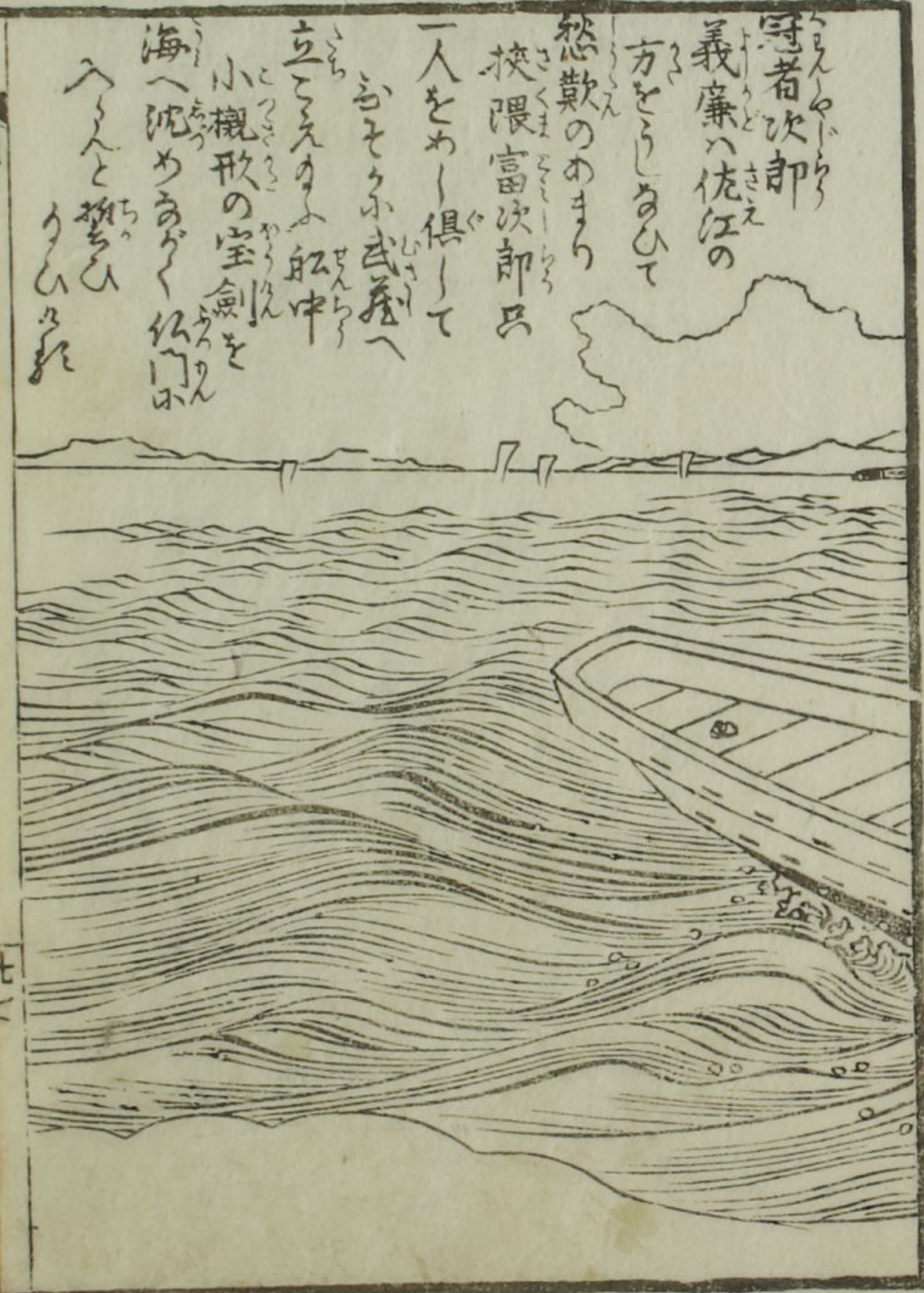
ふ。ま。ま。い。引。マ。弱。と。い。ふ。次。才。人。を。増。加。し。ま。す。三。十。人  
あ。ら。り。あ。ら。し。を。穿。て。引。ま。す。その。時。養。子。居。莞。尔。と。笑。ひ。し。く  
彼。蚪。蛇。引。ら。る。の。如。き。と。い。ふ。小。こ。も。み。ま。も。感。依。り  
と。い。ふ。悔。り。仕。者。も。え。と。稱。親。と。い。ふ。も。の。ま。あ。と。漏。り  
々。と。い。ふ。さ。か。た。安。房。國。の。里。見。養。子。居。の。内。全。才。人。召。有。り。府  
養。子。居。の。夜。近。役。の。侍。挾。限。富。ひ。只。一。人。を。召。俱。り。て。館。を  
ま。の。び。出。る。その。故。い。う。あ。ら。し。の。養。子。居。の。ま。小。佐。江。の。方。と  
い。ふ。女。房。あり。その。容。儀。世。々。と。い。ふ。ま。う。け。し。程。ふ。こ。も。の。く。寵。愛  
の。ひ。く。比。翼。連。理。の。契。結。く。ま。ら。ふ。と。い。ふ。ま。も。持。病。の。瘡



どろつめく 名花一朝の嵐不散りぬ。かゝる歎の形もこれ縁て  
婚縁の沙汰ありき。小弓の御所義明の息女。近日輿入と  
びにふる廉まもく。物うたひ小あひは。徳小遣世の志あり  
潜小館を脱ぎて。浦人不便船を。武州品草の濱不さるのよ  
船中里見の童室小襪形の剣を。ぶらぶら海底へ沈めり  
ととまらち今より。佛門へ入らるる。故郷へうらうらと折言  
のみふりて。かゝる義廉主従の野の由縁不就く。芝崎  
村の道場を走り入り。剃髪のみをよめ。とてえのへ任持の  
聖人うひく。一言匿すあり。祝髪のみいまま。厚さふありと

とと。字寮のこころ。小別室を修理。義廉主従を居せしむ  
たり。さる極小里見。義廉逐電の身を。守りて大小發る  
のひ小弓の義明の京都將軍の庶流足利政氏の二男。して  
年長の方人あり。さる。婚姻を嫌て。お奔せし。と風波あり  
晋泰の親忽不破。と。緯大夏小乃不へ。いり。いも。隱便のこ  
らひを以て。冠者びくを召かへ。へ。か。て。挾隈富し進を  
潜小招き。のひ。ゆり。富。義廉。供。館を。退。れ  
沙も。内。その。坊。方。ら。つ。ん。い。死。義廉。追。田。て。つ。と  
ま。へ。の。一。等。因。の。沙。あ。か。よ。ら。ゆ。と。も。罪。科。脱。へ。と。











これと、この幸のあつて妻不後見加之、最愛の一子歿も喪ひ  
つれ世の中を味氣あることには、日本国中の、天場巡行  
く、また人の後世を吊ひ、五年やそやうやく念願成就しこれバ  
一とび鎌倉へまゐるべし、おりの、東國小杖を曳けし、も、あてあひ  
まわらせし、端せぬ主従の縁あるべし。君は又いつある故あり、  
かく奇ける旅をいふつと、同小、ひ、な、い、え、う、横死のゆ。  
ま、う、へ、ま、も、お、ら、り、あ、い、ひ、細やう小物ぞこれ、は、二、米、い、ま、を  
く、破、た、ま、う、の、足、弱、を、使、ひ、く、敵、を、索、め、ら、ん、の、使、ま、た、い、い、ま、  
ふ、ぞ、れ、と、共、小、鎌、倉、へ、三、城、の、水、草、板、を、い、れ、く、死、ま、わ、せ、く、

よ、れ、小、勲、の、い、へ、と、り、か、次、ふ、た、あ、も、彼、が、志、の、信、の、を、よ、り、こ、ひ。  
あ、り、ぶ、妹、が、の、ま、は、い、の、出、鎌、倉、の、東、國、第、一、繁、昌、の、地、る、れ、が。  
敵、長、吉、も、彼、処、あ、る、の、ま、た、れ、の、あ、る、と、これ、は、ま、が、常、陸  
下、野、の、あ、國、を、素、で、流、より、ぞ、起、く、べ、し、は、い、く、故、郷、へ、う、る、あ、る、  
水、草、を、い、直、小、付、ひ、く、れ、よ、と、い、ふ、小、佐、一、清、一、清、も、乃、と、承、  
引、く、この、処、を、り、水、草、を、使、ひ、葛、飾、の、く、く、い、れ、れ、は、  
へ、兵、ひ、く、り、東、北、を、さ、う、て、ま、う、せ、ら、る、と、れ、は、佐、一、清、の、水、草  
を、得、し、く、名、の、い、か、小、武、元、下、徳、の、塚、あ、る、墨、田、川、ま、で、は、  
し、り、小、この、時、目、も、や、向、暮、と、ま、れ、は、この、渡、を、さ、う、て、ま、う、宿





挾野の次々左へ見の仇を  
 報んぬ時水草を付ひて  
 下徳の々々へまこゆるこち  
 こそ旧の口々々佐三勝  
 のろけその身へ常陸の  
 かくみおのむれん  
 志る小梅塚の  
 小五郎と勝これ  
 客子をさるく  
 水草を  
 うまの  
 豆の



をも水ゆゑべりれとく。只ひ顧み路ぢをいそぐ折まも。傷きずの藪やぶ蔭かげより  
 こもいりやれた大男おほしやう忽たちちとわづれ出でちぢひさる足あしを揚あて。  
 依よ一ひと之ひと情なさけを撲くと蹴けとほ。水草すいそうを小腋こわきふらふらと踏ふをく  
 まは逃のがうせり。依よ一ひと之ひと情なさけをいそぐ蹴けらうと。志こころ絶たて入いりてあり  
 くら。やうやくふ人ひとぞらつて身を起たせむ。水草すいそうの既すでに大集おほしづみらうとく。  
 夜よのよ初更しよとのころあるゆゑ。こゝいとせんせんと慌忙あわてに只ひ程ほど人のとくま  
 めがらつ。秋あきとく彼あ此こを呻う吟げんども。水草すいそうがゆゑにちれり。こゝ  
 かの梅うめと索もとする。野の上の班はん女にのめいも。ぢとちかほそてあり。

花川卷之二終



